

なら御ざればしたものは賣ぬ物、蛤こんとうたふなり、住吉は濱ぐりのえんにいふなりと有り、昔も下さまの家に行ては、唱歌も相應にうたひしなるべし、略○中 或人語りけるは、周防山口に覺定と云ものあり、毎歳元旦に國主の城門に參る、此時門を開くを嘉禮とし、それより諸人出入す、祝詞を唱ふること、千秋萬歳に似たれどもやうかはれり、其服水干に鳥かぶとを著る、士庶の家に至りて、此ことをなすといへり、これ萬歳の古風残りたるなり、覺定といへるは、そのかみさる名の千秋萬歳法師にてありしを、其をつぎたるものなるべし、

〔本朝世事談綺〕四萬歳 六十六代一條院の朝長徳のころ、大江定基參河守に任てければ、その國の民ども、毎としのはじめに來り、千歳樂萬歳樂と舞かなでけり、定基は佛乘に歸して、横川の源信僧都に法を受て、一向釋氏の學びにふか、りければ、佛教傳來の因縁を述て、刈谷の郷の庄司吉郎大夫といふものにあたへて、年の旦に舞せけり、是萬歳のはじめ、今以三河の國より來る、〔著作堂一夕話〕二りうどうだ並せんす萬歳 眞葛原五卯子の話に、せんす萬歳は千秋萬歳なり、秋をすとよむべし、千壽にはあらず、このもの木造の日にまゐれるは私例なり、猿舞は恒例也といへり、千秋萬歳、くはしくは千秋萬歳法師といふべし、大和國窪田、箸尾の兩村より出復、大和の外にもありけるにや、岷江入楚にも見ゆ、三河萬歳は是又別派なり、唱歌は大江定基の作なりとぞ、

〔閑田耕筆〕三千秋萬歳は大和より出る者一種類也、萬歳村有とぞ、河内、三河などより出るも其類歟、京都にては陰陽家の小泉より出、これは禁裏、仙洞、后宮など計へ參りて、世にあまねくは、えらす、壽詞五段、頗古雅にて、大鼓一調をもてはやすと、なん、彼大和の者はあまねく民間をもめぐり、舞ぶり詞がらもや、くだりてけちかく十餘段小鼓もてはやすさま世にまゐることし、因にいふ、彼唱歌にとく、ねかに御萬歳といふ詞、何ごと、も知がたきを、或人いふ、とこ若にて、とことは